当 目 兜 地 遺 跡

1 9 8 0

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1．本編は鳳至郡柳田村当目兜地地内に所在する当目兜地遺跡の緊急発掘調査報告である。

2．本遺跡の調査は、「主要地方道珠洲－穴水線」道路改良事業に係るもので、当初周知の対象遺跡は兜地Ｂ（縄文）遺跡であった。

3．本遺跡の発掘調査は石川県立埋文センターが実施し、石川考古学研究会員の協力を受けた。

4．発掘調査は中島が担当し、原田正彰（能登文化財連絡協議会理事・石川考古学研究会員）氏ならびに平野主事（柳田村教育委員会事務局）の指導・協力を受けた。また発掘協力員は地元柳田村在住の方々によっている。

5．周辺遺跡の分布図（第１図）は、『石川県遺跡地図』（昭和48年・石川県教委）に基づく。

目　　次

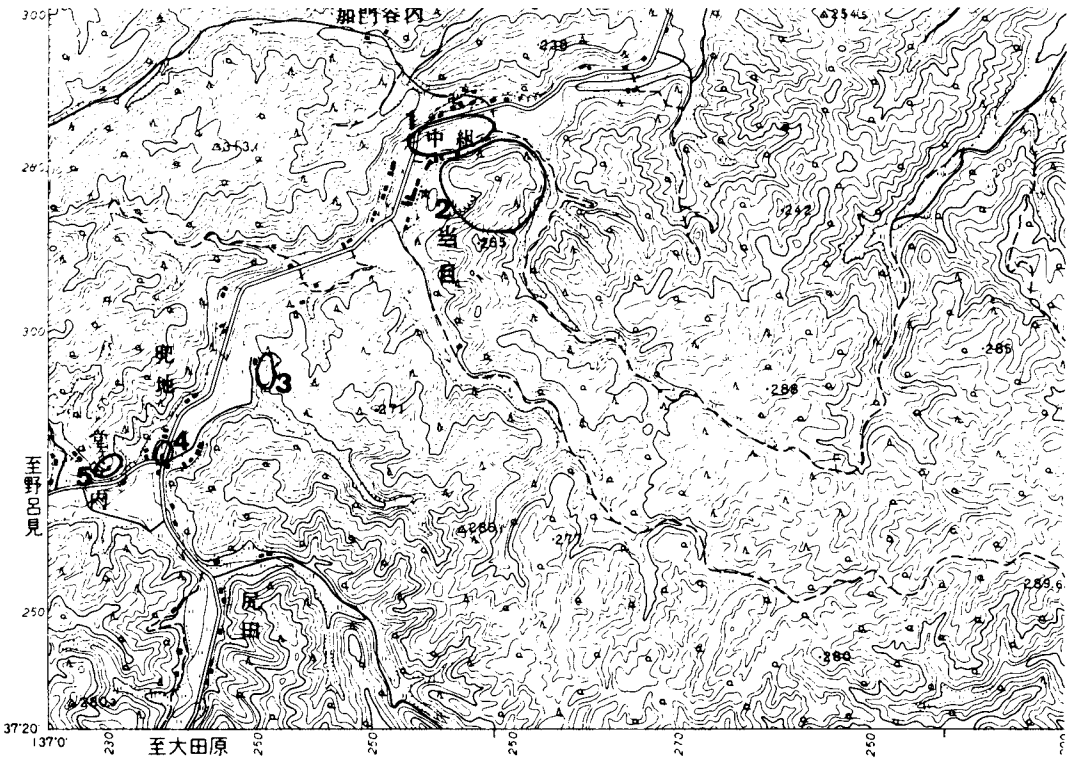
Ⅰ　位置と環境……1
Ⅱ　調査に至る経緯……2
Ⅲ　調査区と出土土器……2
Ⅳ　おわりに……4

当目兜地遺跡（とうめかぶとじ）

Ⅰ　位置と環境

当目兜地Ｂ遺跡は、石川県鳳至郡柳田村字当目22字64－２番地・他に所在する。

「山という山なく・平野という平野なし」と例えられる標高200～300ｍ代の丘陵地が連なる奥能登地方は、僅かに、小河川によって解析・沖積された小谷平野、海岸段丘～海浜に面した小平地に、古代よりの集落の立地をみることができる。このような地勢下のなかでも、とりわけ当遺跡の立地水系にあたる“総称”としての町野川は、上流域にあたる鳳至郡能都町・柳田村山間部の流水を集めた上町川・柳田川を合流させ、輪島市町野町を緩流して日本海（河口は輪島市曽々木）に注ぎ出す、流程約29kmの、奥能登地域では随一の長流を誇っている。



第１図　周辺の遺跡分布図（国土地理院 2.5万分の１柳田）

1.当日中組左近田橋遺跡(縄文)　2.左近田堡跡(室町～江戸初)
3.当目兜地Ａ遺跡(縄文)　4.当目兜地Ｂ遺跡(縄文)　5.蓮花坊跡(室町)

この町野川が造り出した流域面積も、当地域では最大とみられ、一水系で200町歩を越える耕地面積を保有しえた承久三年（1221年）の「能登国田数目録」（写し）の記載によってもかいまみることができる。この流域における、現在周知の遺跡総数を『石川県遺跡地図』（石川県教育委

員会刊・昭和48年）に基づいてみれば、計約74遺跡を数える。これらを時代別によって区分してみると、縄文時代遺跡34・弥生時代０・古墳時代３・奈良～平安時代５・鎌倉～室町時代32遺跡となる。こうした様相は、奥能登地域では一般的な傾向にあり、農耕に基づいた定住化への試みは、弥生期以降小規模かつ散発的に認められるものの、初期農生産――再生産による耕地の拡大化及び共同体の成育も微弱なままであったことは、古式古墳を創出しえていない状況からも窺知され、又、当流域内では僅かに終末期に至って横穴古墳（３基）が河口付近で確認されているにすぎない。平安末期では、一水系で奥能登最大の耕地面積を保有しえた町野川流域であっても、初期農生産の着手以来、古墳時代を通じて有力な地域首長層を輩出し得ぬまま律令体制下に組み込まれていったものといえそうである。この事は、当流域における開発の着手が奈良・平安期を境として本格化したものといえ、中央集推的な政治支配勢力を背景として強力に耕地の拡大化が押し進められていったことを物語っているようである。

II　調査に至る経緯

北陸自動車道が富山―金沢―福井を貫通して、米原で、名神高速道と接続することも間近い。

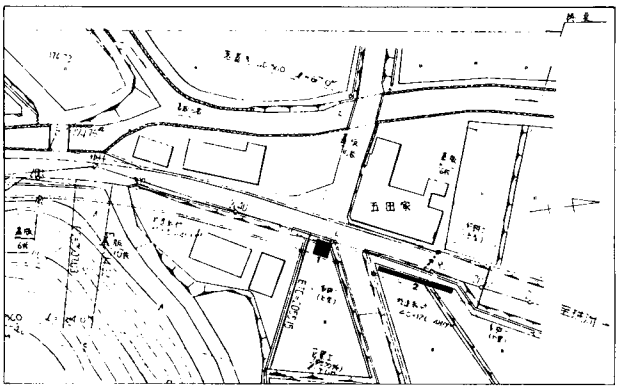
こうした都市圏を結ぶ高速ネットワークの建設はめざましいものがあり、県下でもこれらに即応して、日本海に大きく突出した能登半島の中央山間部を大縦貫するハイウェーの建設も促進されて、その完成もまぢかい。当面の、70年代後半～80年代前半にかけての能登地方における大部分の道路網の整備・建設は、このような基幹道路を基軸とした支線の整備による、「県内を有機的に一体化」しうるものとしてのプロジェクト構想の一貫として推進されているものと考えられる。今回の、当目兜地遺跡の直接の調査要因としての「主要地方道（珠洲－穴水線）凍雪害防止事業」も、基幹線に直結する在来線の拡幅・路面改良である点、高速化時代に対応した交通網の再編成という、一連の開発事業の軌条にのっとった整備事業であったといっても過言ではなさそうである。

石川県教育委員会では、年度毎に、県開発部局との間に次年度以降の開発事業計画と遺跡の保護等に関する連絡調整会を開いている。昭和53年12月に開催された調整会で、県道路整備課より、当該事業計画区域内に埋蔵文化財包蔵地が含まれているかどうかの照会があった。遺跡台帳・遺跡地図等で調査した結果、縄文時代遺跡である当遺跡（県№3603番）が含まれるものと考えられたので、範囲確認の為の現地調査を実施し、事業計画内には中世期の遺物包含層も確認されたので至急その旨回答した。この調査結果に基づいて、当該事業計画実施について検討と協議が進められ、昭和54年８月中に、県立埋文センターが事前発掘調査を実施するということで協議が成立し、昭和54年７月29日～同８月２日に亘る実労約５日間、約20m²の調査を実施した。

III　調査区と出土土器

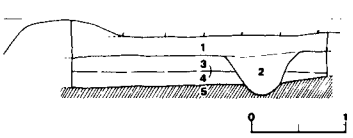
当初の調査対象遺跡となった当目兜地Ｂ遺跡（縄文）は、大正時代初期頃に、今回の調査区に

近接する「五田家」の建設造成工事中に発見されたもので、多量の土器片が出土したと伝えられている。しかし、今回の調査では縄文期に属する遺物の出土はなく、中世期の遺物で占められる。従って、縄文期の遺跡は県道から川によって狭まれた地点で、現「五田家」を中心とした小範囲が推定され、又、中世期での遺跡についても、調査区では、削平平地化された際の移動土中より遺物が出土したものと考えられるため、山際に沿った小範囲に営なまれていたものと想定され、これらの遺跡は狭小河川の解析によった、平地部分の少ない山間地特有の地形的制約に基づいて成立していたものであったろう。



第２図　調査地点（黒ぬり１・２）

遺物が出土した調査区の土層堆積状態は、第３図のとおりであるが、基本的には２層に分層される。第１層が耕作土（約20cm）・第２層が暗茶褐色砂質土包含層（約30cm）となっているが、２層の下部はやや濁りが強くなっている。以下は、黄褐色粘質土の地山面となっている。



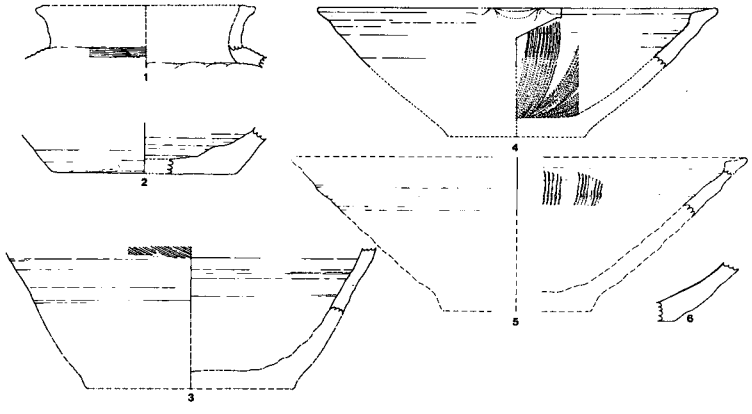
本文中の第１層は１・第２層は３・４に対応する。２は暗渠排水路である。
第３図　調査１区土層図

調査区より出土した遺物は全て珠洲焼片で、総計16片がある。しかし、いずれも全体器形をうかがうことができない小片であるが、できるだけ図化掲載するよう努めているが、薄手で外面に叩き目のある胴部片（壺か）の一部については割愛した。以下、順をおって説明を加えたい。

第４図１～３は壺と考えられる各部分で、頸基部が僅かに残った肩部片の１は、外面ではその付根より横位（左→右）の粗な叩きが施されている。この底部とも考えられる２は、静止糸切痕のある底径14.5cmのもので、外周部にはナデツケ様の調整が認められる。胴部外面については平滑にナデ調整が施されているが、内面では凹凸を顕著に留めている。

３の胴部片は比較的細かい右下りの叩きがあり、内面にはうすい自然釉も認められる。掲載しなかった他の胴部片については概して荒い叩きが残されている。

４～６は擂鉢の各部片で全て内面には卸し目が施されている。４は口径約32cm・器高約10 5cm前後の小ぶりのもので、片口部は折曲げによって僅かに形作っているようで、外面部の両端には顕著に指頭押圧痕を残している。肥厚させた口縁部は、頂部で平坦を感じさせるが内外端部はそれぞれ円みをもち、稜線も弱い。卸し目は、口縁直下より施しており、粗で浅い現存で2.4cm巾での10条が確認できる。胎中には微砂粒が目立ち、若干の粗粒を含んで焼き上りは普通程度のものである。５は口縁部を欠くが、口径約35cm前後・器高約12cm前後のものとなろう。内外面とも横ナデ調整を行っているが、凹凸を顕著に留めている。卸し目は、2.2cm巾内での８条が一単位で、浅くて粗なものである。胎中には粗砂粒が目立ち、焼き上りも甘い淡灰茶褐色をした極



第４図　調査区１地点出土遺物

めて吸水性の高い粗品であったことを伺わせる。６も小片であるが、内底面全体をうめると考えられる粗な卸し目がみられ、焼上りについても甘さが感じられる。

Ⅳ　おわりに

出土した遺物は小片ばかりなので、年代比定には充当性に欠ける面を持ちあわせているが、そのなかで、比較的顕著な様相としてあらわれた片口鉢をとらえることができる。いずれも、口縁基部を強く押さえて端部を肥厚させた、内傾する広い口縁端面を有するタイプで占められていることと、おろし目についても、口縁即下より10条を越える荒っぽい直線的なものに限られている。又、片口部の成形も、指頭による僅かな折り曲げによって形式的な形態となっていると共に、製品としても焼成が粗悪で、極めて吸水性の高い劣品が目立つことなどがあげられる。

こうした様態は、珠洲窯でも後葉～終末期にあたる大畠窯（14Ｃ後半頃）一西方寺窯（15Ｃ）期の特徴を示すものであるが、終末期の西方寺窯では口径40cmちかい大型で腰高の器形が普通であるということを考えれば、当遺跡から出土した片口鉢は大畠窯期後半（室町時代中期）の年代感が与えられるのではなかろうか。

遺跡の性格としては、遺物が出土した地点は山際に近接した眉状平地であり、壺・鉢片で占められ、しかも、緩傾斜地を後世の開墾による平地化の際の、移動土中よりの出土状態であると考えられることから、山すそに中世墓（群？）が営なまれていた可能性が考えられる。

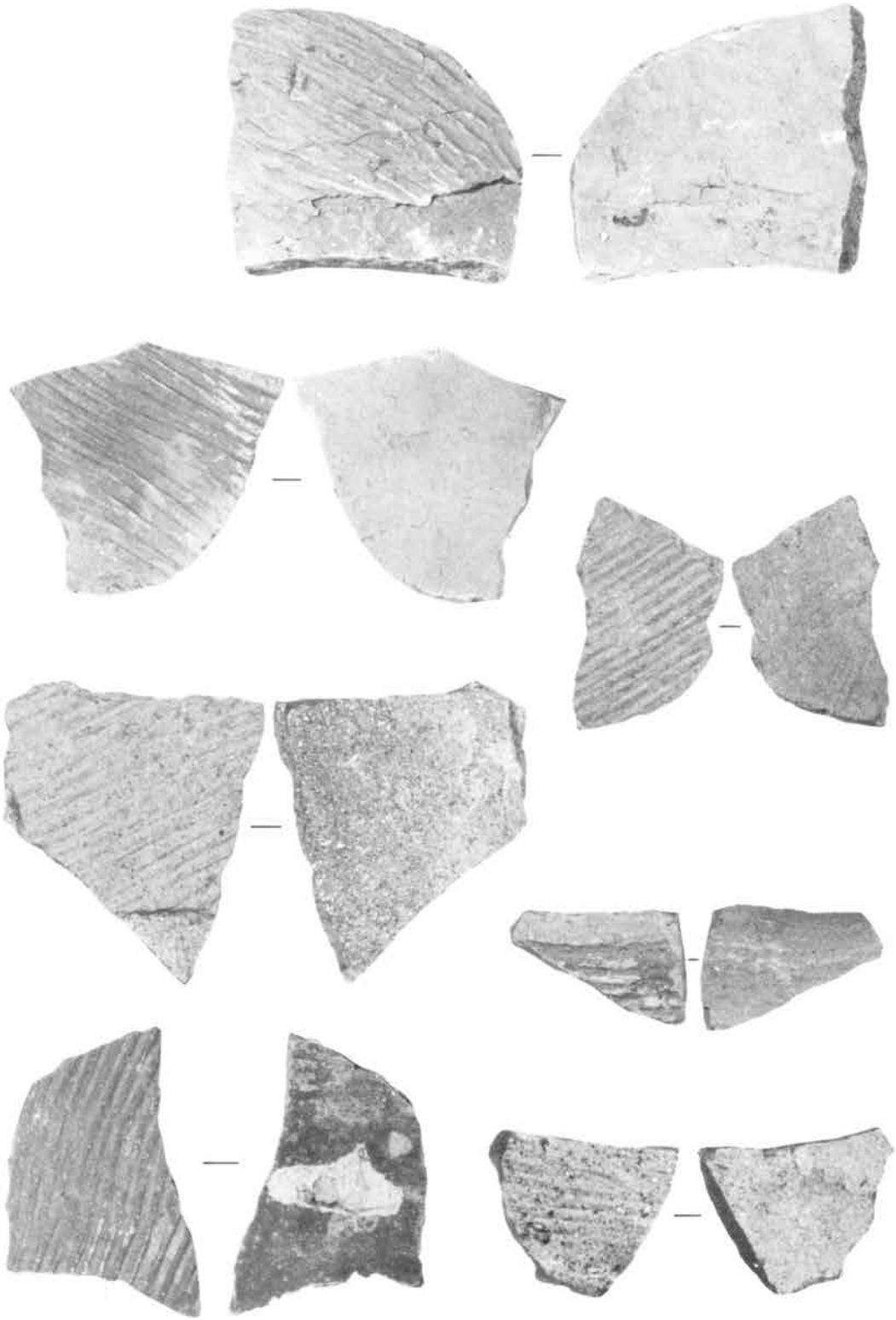
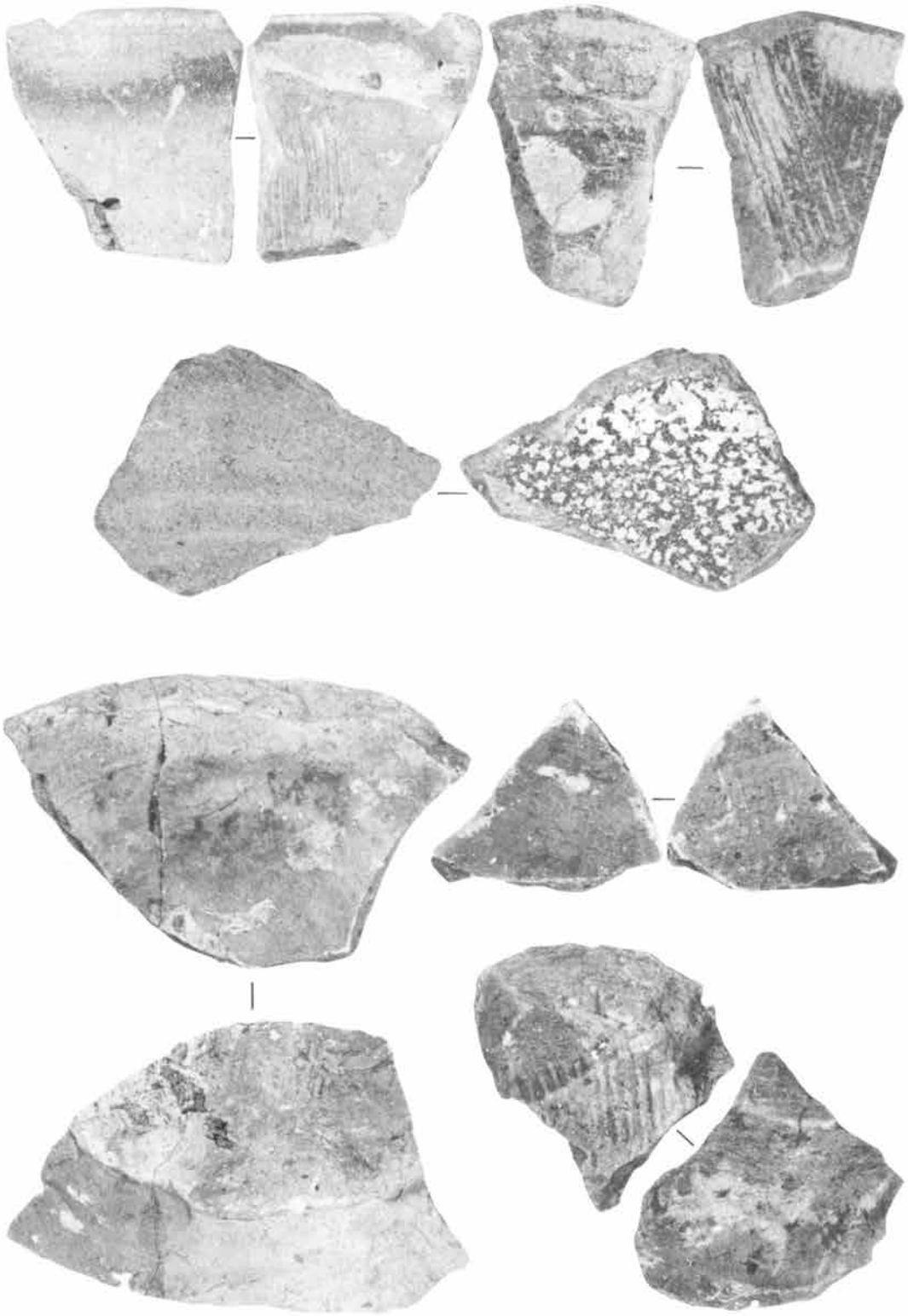
参考文献

① 『柳田村の集落誌』原田正彰編　柳田村役場Ｓ52
② 『柳田村史』柳田村史編纂委員会編　柳田村役場Ｓ50
③ 『越前珠洲』日本陶磁全集７　中央公論社Ｓ51

図版Ⅰ　遺跡近景

図版II　発掘地点近景

図版Ⅲ　出土遺物（表・裏）



図版Ⅳ　出土遺物（表・裏）